

こうか まちかど 特派員 のページ

こうか
まちかど特派員
もちづき
望月 だだし
公司



忍びの里に 新しい鐘の音が響いた

このほど、甲南町竜法師の里に嶺南寺の新しい鐘の音が響いた。地域待望の鐘の音を耳にした瞬間であった。

お寺の建て替えはまれではなく、近時散見されることろであるが、鐘が新調されることは極めて珍しいのではないだろうか？身近な所で見聞したことを紹介したい。



銅と錫の溶解液を鑄型に流し込む作業

嶺南寺は、甲賀流忍術屋敷の南方ほど近い小高い所にあり、周囲を樹木に囲まれた落ちついた雰囲気のお寺である。歴史は古く、始まりは1350年前にさかのぼるとされる。その間幾多の変遷を経て、約300年前に現在地に移築されている。その建物も老朽化がひどく、昨年4月に再建・落慶したばかりである。ちなみに比叡山延暦寺の先々代の天台座主・梅山円了師の出身寺でもある。

鐘楼と鐘の歴史は定かではないが、ご多分に漏れず太平洋戦

争時に軍需のための供出という難に遭っている。終戦間もない時期に戻ってきた鐘は嶺南寺が供出したものではなかった。お寺の名が削り取られ、造りも薄いとされていたその鐘は、30数年前からの割れた音がますますひどくなり、今回はいわば三代目の鐘との交替である。

さて、三代目の鐘は高さ1.2メートル、直径75センチ、重さ約530キログラムで東近江市の鑄造所で造られた。去る3月の発注時と5月の鑄造の際に住職とともに鑄造所を訪ねたが、年間24〜25基を鑄造するという規模の大きい鑄造所であった。

溶解炉で溶かした約1200度の銅と錫の溶解液を巨大なバケツに移し、クレーンで鑄型の上まで移動、住職の読経のもと厳かに湯口から流し込まれる。この時の湯（溶かした銅と錫）の色は何ともいえない美しい色である。非常な高温で重いバケ

ツトを
リモコンで
自由自在に操作し

て、1分間以内で流し込む微妙な作業は工程上で最も緊張する作業であるという。なお、15パーセントの割合で溶かし込む錫は、鑄型の隅々まで行き渡らせる働きをするそうである。

無事流し込みを終えた翌日には、鑄型を外して鐘を取り出し、鑄肌を調整して鐘の完成である。5月末の鑄造から約1か月半、7月19日（木）に鐘が納入され、二代目より約200キログラム重い鐘が無事鐘楼の吊り金具に付けられた。

撞き初め式は住職の読経で始まり、副住職の初撞きに続いて集まった皆さんが次々に撞いて美しい鐘の音が響いた。

鐘の佳い音を長持ちさせる撞木はあまり硬くなく比重の重い物が適しているといわれるが、新調した撞木は棕櫚である。ま



新しくなった嶺南寺の梵鐘

た、1回撞いた後はその余韻が消えるまで2回目を撞かないこと。とりわけ新しい鐘を撞く時に心しなければ：：：ということを住職から聞いた。いわゆる新車の慣らし運転ということだろうか？

鐘は釣鐘、撞鐘と呼ばれる佛教の楽器で、佛教を意味する梵の字を加えて一般に梵鐘と呼ばれる、寺院の諸行事の合図に用いられる目的で造られたが、同時にこれを撞いて佛教に帰依させようとした。国宝級の著名なものに京都妙心寺、奈良興福寺などの鐘がある。

嶺南寺三代目の鐘が、平成の名鐘として聞く人の心にいつまでも美しい音を響き続かせてくれることを願って止まない。